

【主な使用地域】 ロシア極東のシベリア、ハバロフスク州、沿海州に主に分布し、カムチャツカ半島やサハリンでも話されている。中国東北部、モンゴル東部、中央アジアにも話者の集団がある。話し手の合計は約6万人。



どんな言語?

ツングース語は、互いにほとんど通じない10いくつかの方言(言語)からなっています。ですから、ツングース諸語、と言ったほうが正確です。言語のしくみやタイプが似ているので、モンゴル諸語やチュルク諸語とあわせてアルタイ諸言語と言われることがあります。この三者は、代名詞をはじめ単語にも似た点があるので、1つの起源に溯る可能性も考えられますが、互いに影響を与える中でだんだん似てきてしまった可能性もあり、これについてはまだはっきりしたことが言えません。

アルタイ諸言語は日本語とも似たタイプの言語なので、ごくおおざっぱに言うと、ツングース諸語は文法のしくみなどが日本語によく似た言語ということが出来ます。名詞や動詞の後ろに助詞や助動詞のようなものをつけて、いろいろな文法関係を示します。修飾語は前から後ろの語を修飾します。述語はふつう文の終わりに来ます。日本語と大きく違っているのは、ツングース諸語のほとんどが動詞の人称変化を持っていることです。これは所有構造にも現れるので、たとえば「あなたの本」は、sii dapsa-si「あなた 本-あなたの」のように表現します。このこと自体は別に珍しいことではありませんが、「私の頭」と「私の(持っている獣などの)頭」を区別する「譲渡可能」のシステムや、否定そのものが動詞語幹として活用変化をみせる「否定動詞」など、興味深い文法現象が他にもいろいろ観察されます。

者を維持し、子どもでもよくシベ語を話します。

アムール河の汚染など、彼らを取り巻く環境の破壊も深刻な問題で、言語と共にその貴重な伝統文化も失われようとしているのはたいへん残念なことです。

参考までに、最近のロシア領におけるツングース諸語の人口と話者数(カッコ内に実数と人口に対する百分率で表示)の推移を示しておきます(ロシア発表の統計による)。

言語名	1989年	2002年
エウエン	17000(7463—43.9%)	18642(6080—32.6%)
エウエンキー	30000(9120—30.4%)	34610(6780—19.5%)
ネギダル	600(170—28.3%)	505(35—6.9%)
ウデヘ	2000(526—26.3%)	1531(140—9.1%)
オロチ	900(169—18.8%)	426(18—4.2%)
ナーナイ	12000(5292—44.1%)	11569(3068—26.5%)
ウルチャ	3200(986—30.8%)	2718(363—13.4%)
ウイルト	200(89—44.7%)	298(11—3.7%)

📖 お奨めの本 このような状況の中、筆者を含め何人かの研究者はツングース諸語の記録を少しでも多く残すため現地調査を重ねてきました。その成果は「ツングース言語文化論集」として、現在50冊にのぼる資料が刊行されています。そのバックナンバーの在庫や入手方法については、北海道大学の北方文化論講座民族言語学研究室のホームページ(<http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~r16749/gengo/index.htm>)を御覧ください。ツングース諸語についての豊富な文献目録も見る事が出来ます。日本語で読める辞書としては、池上二良『ウイルト語辞典』(北海道大学図書刊行会、1997)があります。それから、ツングース諸語を含む北方の諸言語への手引きとして、津曲敏郎編著『北のこぼれフィールド・ノート』(北海道大学図書刊行会、2003)をおすすめします。

ツングース諸語を話す人々

ツングース諸語を話す人々の暮らしはさまざまです。エウエン語やエウエンキー語を話す人々の生業はトナカイ遊牧で、大きな集団であれば何百何千というトナカイの群れを連れて移動生活をします。彼らが住んでいるのは北極圏に近いツンドラで、木も生えないような土地です。一

音声については、特に難しい発音や変わった発音などはありません。日本人にとっては唯一lとrの区別が難しいくらいですが、これもいくつかの言語では歴史的にrを失ったので問題になりません。ただ日本語と違って閉音節の言語なので、語中では子音が連続します。その中には慣れないと発音しづらいものもあります。

近代になって文字が制定された言語もありますが、基本的にどの言語も無文字言語。その中であって満洲語は清朝を建てた満洲人たちが膨大な文献を残して東洋史その他の研究においても重要な言語です。

●使ってみようこんな表現!

ここではツングース諸語の1つであるナーナイ語の表現を紹介するために、最近現地の人からもらった手紙の一部を訳してみることにします。

batjigoapu, Sinjiro! bitjixawəsi baxambi, banixa.
こんにちは、伸次郎! あなたの手紙を受け取った、ありがとう。

magga agdaxambi, nəku. xoni balidjisu.
とてもうれしいよ、ヌク(年下への呼びかけ)。どうしていますか、

xəmtuni ajasu-nu? buə baldjipu aja.
皆 元気ですか? 私たちの 暮らしは ままあです。

magbodu djuke xam xəjəxəni. (中略)
アムール河の水は 全部 融けて流れ去りました。

si-də ajadji bixəri, gə, pədəm dəradjiguru.
あなたも 元気でいて下さい、じゃ、さようなら。

ツングース諸語の今

ツングース諸語のほとんどは、もはや話し手の数が非常に少なく、しかも高齢の方しか話せない、いわゆる「消滅の危機に瀕した言語」です。言語によっては、残る話し手は数十人、もしくは数人とも言われています。若者や子どもの大部分は、中国領であれば中国語、ロシア領ではロシア語しか話せません。子どもたちは外国語のようにその言語を学んでいます。実際に英語と一緒に外国語の選択科目になっていることさえあります。その中であって中央アジアで話されるシベ語は現在も多くの話

方、沿海州の深い森(タイガ)に住むウデヘたちの生業は狩猟です。アカシカ、ノロジカ、ヘラジカ、イノシシ、ヒグマ、ツキノワグマ、クロテンなどの獣を獲って暮らしています。彼らの経験談には、地球上で最大のトラであるアムールトラもよく登場します。

ナーナイ語やウルチャ語を話す人々の生業は漁労で、秋になると大河を溯って来るサケがその漁の中心です。大量に捕ったサケは、塩鮭や干物にして一年中食べます。時には巨大なチョウザメが捕れることもあり、その卵であるキャビアも得られることがあります。日本人同様、生の魚(つまりお刺身)も食べますが、お醤油はないので塩を振って食べます。食の文化には伝統的な面がまだ色濃く残っています。

しかし一方で生活のロシア化/中国化もすすんでいます。まず住居には伝統的なものは残っていません。民族衣装は、お祭りのときに着るくらいになっています。写真に見るように、北方のエウエンの服は市松模様を持ち、ツングース全体から見て、より古いタイプのものと考えられます。一方、ナーナイの服の渦巻き模様はアイヌなどとのつながりが指摘されており、服の形自体はモンゴルの影響によるものと考えられます。なお彼らの宗教はシャーマニズムです。

ツングースのどの民族も豊富な口承文芸を有していて、何十もしくは百をこえる物語を語ることでできる語り手もいます。そこには韻を踏んだ美しい表現や、今は失われてしまったかつての生活の様子や習慣が描き出されていて、貴重です。「猿猿合戦」や「因幡の白兔」など日本の昔話に似た話も多くあり、これらは今後さらにアジアの枠組みの中で分布や伝播の経路などを研究していく必要があると考えられます。



エウエン(上)とナーナイ(右)の女性